

ずぼんぼの変な表情

多田道太郎

柳田国男が日本の遊びの中でもとくに「かごめかごめ」に注目し、これに大きなスペースをあたえたのは、さすがに炯眼といわねばならぬ。まわりの者がはやしたて、中の者が朦朧状態になるといのは、憑依型シヤーマニズムの典型的な遊びである。

ところで、中の者ひとりが憑依状態におちいつて、それではほかの者はいつたいどうなのだろう。ほかの者は、はやしたて、からかい、それでおしまいなのだろうか。まわりの者もまた、多かれ少なかれ、夢見心地に感染しているのではなかるうか。

とりわけ、中心にくるのが「中の者」といった人間ではなく、なにかの依り代みたいなものばあい、憑

依状態におちいるのは、その小さな集団ぜんたいではなかっただろうか。そんなことを遠く連想させる遊びもある。

今はもう、そうとうの年輩の人でも知らぬことが多いが、「ずぼんぼ」という変な遊びがこれに当る。多くは酒間の遊びだったようだが、幸田文氏がありがたいことに、幼時の追憶としてこの遊びを描いている。すこしながいが、とても興味のある文章なので、そのくんだり、引用させていただく。

「どたばた騒ぎのなかでは、ずぼんぼが最も子供たちに人気があった。これはとっておきの遊びで、ふだんはやらない。半紙一杯に父は変な顔をかいた。目がぎ

よろぎよろした、間のぬけた絵である。四隅に一寸幅の長い足を貼りつけ、さきには一銭銅貨を沈子おもりに入れる。これがずぼんぼである。人々は円坐し、おのおの団扇うちあをもってこれを煽ぐ。四方から煽がれて、ずぼんぼは立ちあがる。風というものは実に咄嗟とっさに不思議な方向に流れるものである。ずぼんぼは下等な顔をふくらませたり皺よせたりして、重い足をひきずりながら、ずるずるびたつと貼りついて来たりする。これに取っつかれた人は負けである。

ずぼんぼや ずぼんぼや、

ずぼんぼ腹立ちや つら憎や、

池のどん亀 なりやこそ、

ささの相手に ヤレコレずぼんぼや。

しまいには拍子も調子もなく煽ぐ。ずぼんぼはきょろつとしてゐるのに、遂に洪団扇はあえなき最期を見せるのである。「父・こんなこと」

今も東京の谷中には「ずぼんぼ」を売る店があるそうだが、その「足」は一銭銅貨ではなく、しじみ貝だ

ということである。どちらが古いのかわからないが、要は足の下からうちわであおぐ。その風で「ずぼんぼ」が珍妙な踊りをおどる。それがおもしろいという趣向である。幸田露伴は自分で「変な顔」「下等な顔」をかいて子供たちと遊んだようだが、店で売る「ずぼんぼ」は虎や獅子の紙人形である。どちらが古いのか、これも知らない。

いつか機会を得て幸田文氏にお目にかかったとき「ずぼんぼ」の意味をおたずねしたが、笑って答えられなかった。いずれ児童戯に類することである。しかし、これもやはり、江戸の町人が靈感を得て不意に思いついた遊びではなく、その由来は獅子舞にあるらしい。——と推定されるのは、「ずぼんぼ」とは獅子舞をおどらせるときのやしのことだからである。

思うにこの遊びも、「はやし—憑依」系列の遊びなのだが、ただこのばあい、「夢中」になるのは、うちわを持つてはやしたてる連中である。この連中こそ、憑依か、それともそれに近い夢見心地におちいつているのではあるまいか。

と言ってくれば、なにもこれほど特殊の遊びを持ち